

オリーブの樹

第155号

2021年10月5日

شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



くちなしの
香に誘われ
ふり向けば
眩暈、眩暈
白化の光

目次

- P 2 夏の歌 重信房子
- P 3 独居より 重信房子
- P 11 戦士たちのリッダ闘争(2) 重信房子
- P 16 第二次インティファダから21年目のパレスチナ 戸平和夫
- P 18 「大資本はなぜ私たちに恐れるのか」を読んで 重信房子

重信房子さんを支える会

敗者復活のできる社会を!

重信房子

さんのみである」とAさんは「後記」で記し、彼を奪還対象者としたことの是非はどうかと考へさせられた、とあります。私達は熟慮する余裕も当時なかったし、国内からの力強い推薦もあったかもしれませんが、今から思うと長期的な見通しを持ってないままに「共に」と、どの対象者にも応じてもらったことに対して、厳しい条件を(結果的に)強いてしまったと、反省すること多々あります。ただ、確実に言えることは泉水さんが革命の道を喜びを持って共に歩み、みんなと一つになって国際主義的な仕事も担い、夫人とも心から愛し合い、有意義で素晴らしい人生(と本人の弁)に間違いはないと思います。共に活動できたことを喜びとしつつ、当時の私たちの限界もまたとらえ返しています。憎むべきは検察のひどい差別の仕打ちです。

5月11日 今日、4月の報奨金を告げられました。一時間20.9円。77時間で1,609円です。当初の一時間7.3円からは増えましたが、受刑者が社会復帰資金にするには程遠い。世界では受刑者の出所後の生活も考へ、韓国やシリアまで労働者平均賃金並みか、8割と言われているのに……。

5月12日 今日の新聞で、ラーム・エマニュエル前シカゴ市長で、オバマ大統領初当選時大統領主席補佐官だった人物がバイデン政権の駐日大使らしいとの記事。ラーム・エマニュエルは、シュテルンだったか、ハガナだったか忘れましたが、イスラエルテロ機関で活躍した父をもつイスラエル人シオニストでもあります。大統領首席補佐官に指名された時イスラエルに居た父親は、「息子はイスラエルのために働いてくれる」と大喜び。でも一年で辞してシカゴ市長へ。日本で、イスラエル・米・日の戦略同盟のためいろいろやりそうです。注視する必要ありです。

5月18日 “イスラエルの自衛権言うならパレスチナの自衛権何処にバイデンの嘘” 「入管法改正今国会断念」の記事。まずは、ほ

5月1日 5月1日にアッバス大統領が5月22日の選挙を延期すると表明したという囲み記事を朝日新聞の国際面で読みました。マルワン・バルグーティらと話し合いがつかなければ、利権第一のファタハ・アッバス派が選挙を取りやめるのは目に見えていたので、やっぱり……です。それよりも驚いたのはその朝日の「エルサレム支局」名の記事の内容です。「~5月22日に予定されていた自治評議会選挙を延期すると発表した。イスラエルと領有権を争う東エルサレムでの選挙の実施が保障されない限り行わないとしている。~」(アンダーラインの部分はシオニストのかねてからの主張です。)東エルサレムは、占領地として国際的に認め、国連安保理・国連総会でも「領土を争う“係争地”」とは認めていません。「係争地」は占領という事実をごまかすためにシオニストが展開してきた論理。これまでの朝日の記事でも初めてでは?……。

5月6日 メイのFBによると、レバノンではワクチンを優先的に受ける人は、医療、教育分野の人々の他にジャーナリストも新たに加えられたとのこと。メイが驚いたことに、ネットでメイのワクチン接種の日のスケジュールを伝えてきたので、それで、すでに4月21日に第一回の接種を行ったとあります。日本より機動的。レバノンは人口が少ないとしても、日本はまだ高齢者の摂取は1%未満。医療従事者も終わっていない。再びの緊急事態延長が知事から求められて、菅政権の頼りないこと!

今日届いた中に「泉水国賠つうしん」終刊号があります。丁度去年から一年を過ぎて、ずっと泉水さんを支えて下さった方々が編集して下さったものです。心から感謝しています。私やJRA関係者は心で支えるしか出来ませんでした。日本赤軍との関係が「争点」となり公判を不利にして来たからです。「泉水さんと同じくダッカで超法規的措置で出獄した人は何人かいる。その中で日本へ送還された人たちで、日本赤軍との関係云々として判決で断罪された人はいない。ひとり泉水博

重信 房子

草原を駆け抜け抜ける風になり夜空に向かおうとオリオンとなる

「^{ドリーマー}空想主義者と言われればそうだと答える」とゲバラの遺した心意気しみる

愚者故に経験貪り経験に学びつ生きる山動くまで

イスラエルの自衛権言うならパレスチナの自衛権は何処?バイデン詭弁に

殺されて殺され続けて奪われて尚空爆下の方々に住む民

入管の扉閉ざして未必の故意殺されし人一人に非ず

水田の樹々を映した梢より螢ゆるゆる渡る夕暮

弁天橋挟み置かれし白百合に無数の我らの夢の象みゆ

人新世狂暑台風洪水にコロナもたゆたうアの方舟



つとします。スリランカ人女性の犠牲でやっといどい入管の差別の実態が少し焦点化。何よりも国際水準の人権とかげ離れた日本の実情を世界に晒すべきです。難民受け入れ含めてあまりにひどい。今の改正案が通ると、どんどん危険な強制送還が行われ、滞在を求め、あるいは難民認定を求め人々の逮捕や死をもたらすのでは……。米国でのアジア人排斥・苛めは他人事ではなく、日本は入管権力側がアジア人排斥、いじめ、人権無視が続いている国です。

5月21日 丁度届いたフォーリンアフェアーズNo.5に外交問題評議会会長のリチャード・ハース論文があります。(この保守論客はいつも世界の論調を方向付ける、または追認する役割を果たして来ました。もちろんイスラエル寄り)。今回の「グローバルな大国間協調の組織化を一多極世界を安定させるために」では、第二次大戦後の欧米主導のリベラルなポツダム・ヤルタ秩序では最早安定は出来ない、ポピュリズムや非自由主義の傾向は続く。「多様なイデオロギーをもつ多極化した世界」は到来する、これを解決するためには19世紀欧州の「大国間協調」を世界大に広げ、中国・欧州連合(EU)・インド・日本・ロシア・米国をメンバーとして国連の上に位置させる、「グローバルな大国間協調体制」を立ち上げて、大国の「運営委員会」による世界支配秩序をめざそう、という主張です。対中強硬論はどっちにしる行き詰まり、戦争か、冷たい妥協の先を見越しているのでしょうか。国連安保理は拒否権を振り回す常任理事国間の対立によって機能不全になっているし、国連は大きすぎて官僚的・形式的すぎるとして、その上に大国の運営委員会を置くというもの。国連は総会に示される「一国一票」の原則が米国には邪魔で、これまでも国連をその点で排除して来たのです。新運営委形成で大国の既得権維持の妥協駆け引きを国際秩序に代えようとするものです。必要なのは一国一票の基礎に基づく国際秩序です。リチャード・ハースらの今後の構想は益々国連を形骸化させようとするものです。

5月22日 午前中に届いた昨日の夕刊と今日の朝刊で「イスラエルとハマスの停戦」「エジプト仲介合意維持懸念も」と一面全体の記事。これまでガザでは子ども65人を含む232人が殺され、負

傷者1900人以上。どれだけの爆撃をイスラエル軍は行ったのか。ハマスは10日以降4340発のロケットを発射し、イスラエル内で12人が死亡。弾圧・封鎖包囲の続く中でハマスの兵站力の維持には驚かされます。米国はイスラエルの「自衛権」ばかりを主張するには、実は自分たちの政権の大事なスポンサーであるユダヤ資本やイスラエルロビーの要求によって成り立っていることを明かしてあまりある現実です。ネタニヤフもまた首相職にしがみつき、起訴を免じる画策をするために弾圧を利用し、それによって益々人種差別と排外主義をイスラエル国内に広げています。ガザの人々のコロナ感染も心配です。占領国は「ジュネーブ条約」によればワクチン供給義務を負っているのに一向それが無い。「オスロ合意」を盾にとつて。

5月28日 “監視にも独房にも慣れ二十余年来年の今日自由を浴びる” 思わず今朝、点呼起床前のベッドから隙間に覗く青い空をみていたら零れた一首です。気概はあったけれど望みは薄いと思っていた満期までの命がつながりそうそうです。まだ一年ありますが、“判決は終わりにあらず始まりと服わぬ意志ふつつと湧く”と詠んだ第一審判決からも15年が経ったのですね……。

5月30日 リッダ闘争の日。現地時間で夜10時半頃と報道されていたので、日本時間では31日の明け方になります。「訓練した我々三戦士が、計画どおり警備兵を撃ち、慌てた警備兵が旅行客に向かって無差別に撃ち返した。その結果、戦場に巻き込まれた人々が、多数死傷した。しかし、今僕がそう証言しても、自己弁護にしかならない」これは、85年に捕虜交換で解放された岡本さんの回想の一部ですが、72年の事件当時はこの無差別か否かの論戦が、アルハダフPFLP事務所を中心に行われました。戦士らが自ら決死するまで、何も出来なかったイスラエル警備兵は何をしたのか？ 殺されたイスラエル兵以外のイスラエル兵らは日本人戦士をわからず、乱射したはずだと。欧米のジャーナリストやシンパの人々ですが、調査を求めようと討論。勿論、イスラエルは調査拒否。そして、ガッサン・カナファーニが殺されて、その件もそれまでに。そんな当時を思い返します。勿論、戦術形態から非難されても日本では当然だったかと思えます。戦士たちと対話しつつ、いつ

もこの日を過ごし、また、パレスチナの人々と宴を催して国際主義を記念していました。

今日は静かに作歌しつつ、5・30シンポジウム、昨日の丸岡さんの命日その他を考えています。“戦死後に届きし文に誓いたり戦士らの理想孕みて進むと”“標的を違えず敵兵撃つたろう無差別乱射と歴史は言うが”“草原を駆け抜ける風になり鳥になり夜空に向かってオリオンとなる”

6月10日 和尚が差し入れて下さったもの、毎回楽しみなのは月光歌会の歌の数々です。5月の歌会は26首が各人から提出され、それを批評し合い一人4首ずつ選んで、票数を示すものです。批評のところは学習したいのですが、のちに遅れて歌誌「月光」に載ります。和尚が即席に高得票と、私の一首の票を書き込んだものをコピーして送って下さるので、それが励みになり学習になります。5月の題詠は「スポーツ」です。私が選ぶとしたら

・おんなゆえ涙ひかりて瞬けばサンドバックの砂零れ落つ
・あをふかく潜水すれば惑星の水沸き立てて黒髪流る
・往け素潜りの息果つるまで雨雲の切れ間の見える向こう岸まで

の三首です。私の一首“今どきのバッターボックス時として香水匂うと審判の言う”も当日の最高9票の3首のうち一首に選ばれました。これは、新聞の「ひと」欄に載ったプロ野球審判が語っていたのを詠んだものです。

六月の歌会の御題は「扉」だそうです。“入管の扉閉ざして未必の故意殺されし一人一人に非ず”と零れました。扉とは入管窓口の扉も拘束の扉も法を盾にした悪質な扉も……。被收容者に対する差別や排外主義的な拒否が続き、牛久でも九州でも大阪や名古屋でもハンストが続く死者も何人もこれまで出ています。今回スリランカの女性の死を深い日本の行政の犯罪と反省して「人間らしく扱う」ことから始めてほしいと願うばかりです。スリランカ人のウィシユマ・サンダマリさんの收容中の姿が写ったビデオ映像開示から、遺族に謝罪しつつ死の事実を嘘なく伝えることです。

6月16日 視察委員会(第三者機関)の「もくせい杜通信」4月号通巻2号が届きました。視

察委が收容者の声を聴き当センターへ提言する内容です。「一ヶ月に一度購入できる菓子代が高すぎる」というのもあります。「起床前に読書可にしてほしい」という要請に、当センターの回答「医療上の制約等個別に判断する場合を除き、原則として禁止していない」とあり初耳。確認すると、そうだったとのこと！いつから？周りの誰も知らなかったし、「生活心得」にもない。でもありがたい。早速起床前読書しました。読むものは書籍のみ可で、資料新聞はダメとのこと。今日工場から戻って診察。大腸内視鏡のポリープの病理検査結果を教えてくださいました。1~5までの管状腺腫のうち、3とのこと。5が癌、1が正常。5ミリでしたが大きくなれば癌。でも切除出来てOKです。ワクチンもまだ不明とのことでした。

昨日、新しく教育指導担当官(若い女性)から、出所まで一年を切ったので「改善教育指導」を週一回行うと言われました。被害者への反省など、被害者団体の方との対話もあるそうです。どんな教育指導か、これから興味を持って関わっていきたいです。今後の為にも。

6月21日 オリンピック強行・無理強いワクチン接種をピストンに、支持率を上げようとする菅政権。「GOTO」の繰り返しです。口先の「国民の命」や「安全・安心」も政府方針強行の枕言葉。これほど国民を愚弄する政権もない。「学術会議問題」から、ずっと同じ対応です。

今日から当センターも夏暦本格化で、今秋から9月まで週3回の入浴です。

Kさんからの久しぶりのお便りで、とても貴重な資料を送って下さいました。一つはKさんのお兄さんが豊橋空襲のことを調べていて、杉田有窓子という人の本に出ている漢詩をコピーして送って下さったことです。この人は、1907年生まれ、1985年に亡くなられている昭和期の新聞人だとのこと。私の父が1903年生まれで、それに祖父は漢学者で、父も漢詩をやる人でしたから、未知の方ですが漢詩にする心がなんとなくわかります。ふたつの漢詩(「赤軍ヘルメットヲ凝視シテ感アリ」と「重信房子ノ放映ニ感アリ」)を頂いて読んでいます。放映とは、山口淑子さんとのインタビューのこと、との補記がありました。知らない人と出会い直したようで嬉しいです。山口さんや父を思い出しています。

もう一つは、韓国のイスラーム学者、李ヒスさん（聖公会大学客員教授）による、「イスラエルによる非常に意図的で巧妙な挑発」というタイトルの、パレスチナ問題のこの間の本質を解説した内容の資料です。韓国でも米欧情報が一般化していることをしっかり批判しているものです。とてもよくパレスチナの実情・歴史も語っていて、韓国でもパレスチナ連帯があるのだろうか……と思いつつ読みました。韓国にはまったく知識がない私です。貴重な資料に感謝し、来年の再会を描いています。「救援」6/10号も受け取りました。入管法改悪廃案に継続した闘いを、と訴えています。いろいろな記事が満載で読みごたえがありますが、「イスラエル・ネタニヤフ政権のガザ地区空爆を弾劾する！」と、リッダ闘争のことも載っています。

パルシステムのカタログや「UR住宅ガイド」UR賃貸住宅カタログ。都内2DK、13万～16万位……。うーんです。入居資格も定収入や家賃の100倍の貯えのある人。すみにくい世界を学習中です。都営住宅カタログも前に送ってもらいました。いろいろのものを読みつつ、生活するイメージを取り戻そうとしています。

6月22日 新聞を読んでいたら、デジタル庁の家賃が月7400万円とはひどい。「赤プリ」跡地の最高級の紀尾井タワー19F、20Fに入る必要があるのか？と驚き。虎の門ビルは年2億2400万円だったのに年間8億8700万円と4倍のムダ遣いです。今働く人は350人、発足時は500人なのに。

6月29日 工場でワクチン接種について「希望します」に〇印をつけて書類提出。でも「接種券」は自分で準備する必要があるとのこと。また、役所に問い合わせねばと……。

6月30日 堂山道生さんの訃報が届きました。6月27日に逝去されたそうです。肝癌だったとのこと。赤軍派時代、右も左も判らない私を、書記局長として7・6前いろいろ教えて頂きました。書記局員は藤本敏夫さんと私です。

6月に知り合い、10月にはもう逮捕され、その後70年6月～12月保釈後の活動に尽力し、精根尽きて闘いから去って行った堂山さん。当時自分たちの「武装闘争路線」の無理が行き詰まったの

に、その路線をとえず、「個人の弱さ」で活動を続けられなくなった……最高責任者なのに、きちんと会議もせず、一人で抜けるのは無責任だと思ってしまう。堂山さんの後を森恒夫さんが担いました。武闘路線が赤軍派の前提だったので、この路線を下すことが出来なかったし、またそういう考え方は「日和見」として発想できなかったのです。様々の良心を持った「革命家」の多くが、今も有効に活動していたら……と思ったりします。当時の仲間を思い出しつつ、堂山さんの逝去を哀悼します。

7月5日 熱海の土石流の激しさをニュースで見ました。Eさんは伊豆山で優雅に暮らしているはずで、その伊豆山の土石流が起きた地区です。大丈夫でしょうか。安否確認が出来ないのがもどかしい。Eさんは、いろいろ私のこと案じて下さって、出所後の再会とお礼を伝えていたところでしたが……。元気でいてほしい旧友です。

7月7日 今日初めて出所に向けた「教育プログラム」というのを受けました。教育のタイトルを尋ねたところ「被害者の視点を取り入れた教育」というもので、12回にわたって毎週一時間行われるそうです。次回から9回は外部の講師による教育です。今日は2人の女性教育官から、前回から何か考えたことは？ 自らの事件に対する考え、被害者の対象は？ 被害者という概念から何が頭に浮かぶか？ 図式的に次々と示すマインドマップなどを記したりしました。私はこれまでも拘留理由開示法廷、公判でのべてきたことを中心に、自らの考えを表明しました。

7月9日 Eさんの無事が確認できてうれしい。伊豆山の彼女の館の裏も崩壊があり、停電が続いていると、Uさんが知らせて下さってホッとしています。復旧にはまだ時間がかかりそうですが、元気でいてほしい。東京は第4次の緊急事態へ。8月22日まで。それでもオリンピックは無観客でやると。何のための誰のためのオリンピックか……。これを機会にもう取りやめてしまう方がよい。多くの競技で、資金のある富裕国の選手が勝つばかりになり、大企業独占の金儲けと化したオリンピック。コロナで休業を強いる一方で、世界を呼び込む東京。何なんだろうと思うのが自然だ。

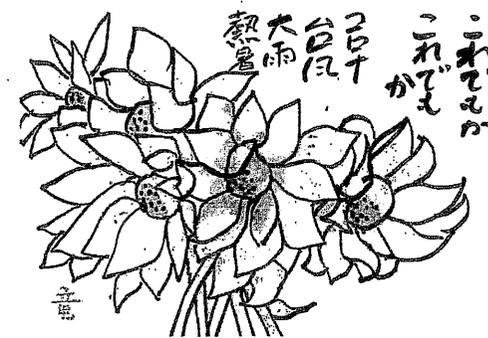
7月11日 短歌学習。歌誌「月光」のバックナンバーを学ぶ。好きな歌人も多いし、良い歌はとっても刺激になります。高橋和恵さんの抒情的な歌とか、川俣さんの歌も好きです。また、岡部隆志さんの批評も学習になります。福島師の歌の多面的な詠み方も学んでいます。お題の「橋」を考えると、やはり山崎クンの殺された弁天橋が真先に浮かびます。あの事件で、運動のあり方も変わり、自分の参加姿勢も変わったので。10・8です。でもうまく詠めない。“夢の形象（かたち）数多（あまた）我らの声聞こゆ弁天橋に君を悼めば”“落暉浴び血潮に染まりし弁天橋悼みの白花（びやっか）赤く燃え立つ”“弁天橋悼み置かれし白百合に無数の我らの夢の像（かたち）見ゆ” 納得できるまで詠めない……。語彙が不足している感じです。

7月14日 今日は午後1時間、教育プログラムの受講がありました。外部の講師は新聞で存じ上げている人でした。息子を事故で亡くされ、被害者に何の情報も与えられず、被害者の人権に父として立ち上がった人です。私が名前を気に留めていたのは、この人が他の人と違って死刑廃止の立場で発言していたからです。話しているうちに、大谷弁護士や太田さんのペルーの子供基金（永山則夫）で、大谷弁護士とも知り合いであったことがわかり、気持ち的にも姿勢にも信頼できる人だな、と思いつつ、今日は私が話すことが多く、次回からもっと話を学びたいと思っています。

7月15日 今日は久しぶりの青空。まだオリブの樹154号は届かず、待っているところです。2時半から早めに工場を出てコーラスの講堂へ。マスクとフェイスシールドの発声練習も慣れました。「七夕」「川の流れるように」「古里」「花は咲く」。今日、ピアニストは「乙女の祈り」を奏で下さいました。

もう高橋和恵は読み終えました。「革命運動、変革運動には、その担い手である人間とその人格というのが非常に重大な要素」と述べています。そうだ、こんな風だった……と当時を回想しながら。知りたかった「うっせいわ」の歌詞も届きました。

7月16日 東京は梅雨明けです。工場作業中、新しい処遇統括より面接で現状と今後の希望や見



通しなど聞かれました。また、今日出した手紙が検閲でひっかかってしまいました。「教育プログラム」の講師の名前削除しました。

Tさんの暑中見舞も受け取っています。受け取った資料を見て驚きというより怒りも。一ヶ月前までモサドの長官を務めていたヨシ・コーヘンが「ソフトバンク・ビジョンファンド2」の現地事務所長に任命されたそうです。投資ファンドの所長になったが、金融・投資の分野での経験は多くないが、ソフトバンク側はコーヘンのイスラエル企業や科学技術専門家とのコネをいかして、シオニスト政権との協力に新しい道を開拓することを期待していると、ロシアのスプートニク通信が伝えているようです。

岡本公三さんを捕虜交換で解放させたPFLLP・GCのアハマド・ジブリル議長の死亡が7月7日発表されたという。83才だったそうです。パレスチナ人を父に、シリア人を母にもつジブリルは後継者の長男ジハードを2002年ベカー高原地域でモサドの手のものに殺されています。常に民族主義原則に立つ、強固な意志のリーダーでした。ご冥福を祈ります。

7月19日 夏らしくなって真夏日が猛暑日になっているようです。でも昭島の居房はいつも寒い。冬の少し寒い房がずっと続いている感じです。工場の方は快適なのですが、房に戻るとズボン下をはき、カーディガンが必要です。起床時も。気温上昇でベランダ運動もないので、八王子時代のように夏が実感出来ない。あの頃はクラクラする灼熱下、麦わら帽子かぶってトラック3周位してたのに。今はもうそんな体力もないし。

「情況」誌はとて面白かった。若者たち、高校生、大学生の別々の座談会が載っていた中で、アクティブなこうした人たちが何を考えて行動しているのかわかります。田中駿介さんが一番全共闘センスに近い発言をしています。また、「北園高校現代史」のドキュメンタリー作成過程の制作日記がとて面白い。

7月21日 今日工場刑務作業3時までの間の13時半から14時半、教育プログラム受講がありました。前回、講師が私の考え方を理解するのに、私のどの著書を読んだら良いか？と聴かれて「日本赤軍私史」と由井さんの「情況新書」をあげました。「私史」は分かりづらいし、生い立ちを補うものとして由井さんの本をあげたのです。今日は講師がしっかりその本を持参し、読んで、レジュメまで準備していて、圧倒されました。本「私史」は長いので、まだ全部読み終えていないが、読んで感じたのは、まじめに思索していること、本当は平和主義者ではないかと思う、と言って下さって、少し驚きましたが、とても暖かい真摯な姿勢で読んでおられます。そして「私史」の本の後に「支える会」の裁判報告があるのですが、それを読んで「状況証拠しかない。状況証拠だけで有罪にするのに私は反対です。これはひどい。20年は長すぎる。旅券法だけが罪ではないですか」とおっしゃった。レジュメでは山口淑子さんや寂聴さんのインタビューやMBSのTV番組など、私の知らないものもあり、寂聴さんの話や、ネットで「オリブの樹」「オリオン会」も見つけ、「オリブの樹」は151号を読んだそうです。報道されている私と違う私を公正に見て、報道の一方的なことを感じている、と語るなど、獄に入って弁護士以外で初めて人権を尊重し、弁護士と同じような視点で語る人と対話出来、学べてありがたいことです。アラブでのアラブ人や政府の反応、パレスチナのこと、聞かれるままに語りつゝ一時間はあっという間です。反省の機会ですが、講習を楽しく有意義にとらえています。真面目で常に謙虚で、対等に受刑者と対話する良い人に巡り合えたと思っています。

7月26日 暑中見舞いがAさんから。4月24日からAさんらが「先住民族アイヌは、いま」展を開催されて、いまでも奈良県内を巡回中とのこと。

ひと回り私より年上のAさん、情熱と献身がパワーに。コロナなんのその、の活力です。

前田弁護士、原告に加わった「安保法制違憲訴訟」、憲法判断を回避して棄却されたとのこと。「法の支配」と「立憲主義」をゆるがせにしたあの法制、三権分立の危機に「憲法判断の回避は司法の自己否定に他なりません」と。まったくその通りです。「統治行為論」の詭弁を批判の要に、国会でもなんとかくつがえしてほしいです。

からすうりの大暑の写真とお便り。デジカメ歌人、暑い！とのこと。こちら少し寒い房です。“早

曉に花の骸に会いたりき夢の欠片喰い烏瓜しばむ”の一首がいいです。烏瓜は不思議な花「真夏の夜の夢」の花です。

7月28日 今日教育プログラム講習では、検察の批判で講師と私は一致して盛り上がりました。被害者に対する検察の対応のあり方、苦い経験話を話して下さい、「99.9%の起訴有罪率は、民主主義国家ではありえない」というので、私も自身の経験—検察のシナリオにあわせて被告の無罪証明となる資料隠匿や取り調べの「生きて獄から出さな、と上から言われている」etc. —から「海外から見ると99.9%は全体主義国家です」と話しました。メイの著書も読んでくださって、私に対して、世の中を良くしたいと、率先してやるべきことをやってきたと思うし、とくに悪いところは見当たらない、と感想を述べつつ励ましてくれています。もちろん「被害者」の立場の講師の受刑者の私への授業なのです。でも講師は、自身被害者として、これはおかしいと怒りから行動を起こし、学習を通して団体を形成し、社会の不正を正そうと被害者の立場から司法の分野でずっと活動してきました。常に一つの情報でなく、いくつもの情報を分析し対策を立てること、また、行政や立法に係わってきた具体的な前進を学びました。私たちは司法や政府に言ってもムダと一挙的に変革を目指してきましたが、一つ一つ体制の中で矛盾の改善を求め、立法まで動かし作り上げていくやり方を学びます。現時代の闘い方の一つで、それが有効な分野の活動を知る思いです。死刑制度反対を含めて。

Aさんが主催されている「巡回展 先住民族アイヌは、いま」(先住民族アイヌの今を考える会主

催)の立派なパンフを今日交付されました。わかりやすく、写真を多く掲示しているので、流れや生活・社会も学ぶことが出来ます。感謝しつつ読み始めました。“届き来しアイヌの冊子友よりの愛と連帯の巡回展に学ぶ”

Iさんからの大量の資料「PFLP」や「かけはし(ネグリ論)」を興味深く読みました。「フォーリンアフェアーNo.7」も読んでいた途中。直接誌紙交換の「ラジカルチェック」や「ザ・レッドスター」なども届いていますが、「オリブの樹」は送って下さったでしょう。

7月29日 「季刊アラブ」交付を受けました。資料も入手しました。レバノンの中央BK総裁(1993~任期)が中心になってハリリ(父)時代から国をギャンブル化(ハイリターンの国債を買わせる。その手数料を親族の会社で着服し、トップで分配し合っていた)で、国を破産に追い込んだらしいことが、やっと米欧の追求で明るみに出てきたらしい。手数料は3億3千万ドル(約350億円)。もっとあるはず。「カラクリが隠されてわからないが、富豪ハリリを首相にしたら国が持ち直すと思ったが、逆に国を売ってボロ儲けしている」とレバノンの友人たちが常に問題にしていたのです。「国家ぐるみの腐敗の闇、解明なるかレバノン、カギ握る中央BK総裁」の記事に注目して読みました。レバノンは今680万人の国民がいて、パレスチナ難民50万、シリア難民100万人超が居るとのこと。スーパーインフレで1000ドル位の給料は10分の1で、半数以上の住民が貧困ライン以下という今のレバノンに昔の「中東のスイス」といわれた時代を知るものとして驚きです。米欧は、ヒズブッターが強い分、助けようとしないうです。新自由主義の破綻の様は、「アラブの春」を呼んだし、レバノンのデフォルトに示されています。

7月30日 去年、刑務作業開始してから1年が経ちました。チームワークで楽しみつつ、有意義に民芸品(ダルマ)作りをしています。「人生でこんないい時は無かった」と言う年配の人もいて、びっくりしましたが、お互いを思いやり、ダルマをより良いものにと皆張り切っています。「報奨金」は、去年のはじまりは、1時間7、8円でしたが、今年7月は、20、9円で、7月までで、累計12,299円になりました！「ちりも積もれば」です

か？しかし、これでは受刑者が社会復帰する手元金には程遠いです。「犯罪者」が罪を償っても「敗者復活」の乏しい日本社会で生きていかななくてはなりません。出所後の人びとにとって再犯率を下げ、社会復帰の一助としても、労働者の平均賃金の50%くらいの労賃は支払われる必要があります。特に若い人たちが将来の希望を描くことができるように。刑務労働に対する国連の調査でも日本は飛びぬけて劣悪です。敗者復活社会を！と願いつつ。

8月9日 オリンピックもやっと一段落。菅内閣支持率28%との今日の新聞。それでも投票は、35%が自民党にするとの世論調査。他に選択肢がないためでしょう。こちらは13日~17日までお盆休み。「うっせいわ」の詞を読んで感心している昔の若者、私です。

8月12日 歌会七月のAさんたちの歌二十九首のプリントが届きました。私が共感した五首は“足だけの筋力低下ではない民主主義お前は歩いているのか”“好きな詩をそらで覚えて手土産に死ぬ楽しみが一つできました”“オキナワの声にシルバー奮い立つ遺骨混じりの土砂を使うな”“紛争の絶ゆるなき世界新たなる戦を憂う基地あり沖繩で”“この頃は少人数のクラス会彼奴も死んで喧嘩も出来ぬ”歌を読むのは良い刺激です。

TVも新聞もさかんにタリバン攻勢、アフガン危機を伝えています。米国政府がISを作り出したように、結果的にタリバンを育て、手に負えず逃げ出すのですから。愚かな「反テロ」戦争宣言以来、ゼウスのごとく米軍はアフガン、イラクと住民虐殺を繰り返し、結局混迷を大きくし、収拾出来ず放棄。土着の民衆は、米軍の空爆で無辜の家族友人を殺され、米軍を憎悪し、益々タリバンに頼りました。利権を米欧に保障されたアフガン政府は自立したことはありません。あるのは米軍撤退にどう自分たちも脱出するか。イラクの惨状もリビアも同様です。米欧が気に入らないと優る軍事力で破壊しても、前より悪化させることを何度も無反省に繰り返しています。サイゴンの時のように、反面教師ISと米政府です。

8月15日 敗戦日。ヒロシマ・ナガサキに続く

この八月。コロナ・大雨・台風・洪水と「人新世」紀を終わらせようと地球が大奮闘しているような八月です。お盆でもあり写真を飾り、送られた「月光88号」を読みはじめています。初めのページ、福島先生の月光庵目録の中に「重信房子父」とあり、こんな一首みつけました。“世界のために生きよ信義をつらぬけよ！ 昭和維新を夢みし父は”。“12人の女たちへの人物ルポ、島崎今日子『だからここに居る自分を生きる女たち』を読む。庄巻は元日本赤軍リーダー重信房子。懲役20年の刑期を医療刑務所の独房で戦う彼女の支えは父の存在であったのか」とあります。このお盆、対話している父が心の中に居ます。矢澤重徳さんの香港の雨傘運動の友を詠んだ歌の中にも“捨てられた傘にも似たる胸の中十指ひらいて確かめている”の次にこんな一首。“黄の花粉ワイシャツ染めて「菜の花の果てなき視界」重信房子よ”と。前号の私の一首を受けて下さったものでしょう。励まされ学習しつつ「月光」を読んでいます。私の分は凡作ばかり載っていて、ちょっと自分がかっかりなのですが……。

8月18日 今日「改善教育」のプログラム授業。リッダ闘争以降何を目的として闘ってきたのか？ の質問に答え、アフガン情勢をどうみるか？ 米欧の変わらぬ植民地政策、民衆を反米にタリバンに追いやってきた歴史。現在、国際社会はまずタリバンの政権を認めるところから貧困や戦乱の復興に支援を強力に推し進めるべきだと述べました。講師もアフガンは平和的革命ですよ。普通の人民は喜んでいるでしょう、と話していました。日本は、真っ先に大使館員12人が出国。誰が指示したのか？ 過去の満蒙開拓団や民間人を置いてきぼりに、我先に逃げたエリートたちのように。出国する必要もなく、残って邦人とアフガン人協力者たちを支えること、大使館業務の継続こそ問われています。

8月20日 アフガニスタンでは、混乱が続いています。アルガンの多民族国家故の歴史的な対立や、米国の民主主義・人権に慣れ親しんだ勢力、タリバンのイスラーム主義、米欧を中心とする思想・政治的介入、まだタリバンの新しいイニシアチブの国の形不明な分、余計です。国際社会は、アフガニスタン人民の、タリバンを中心とするイ

ニシアチブを認める立場から、人権、特に女性の人権や法の保証を求め、国の自立性を促していく道を取るべきだと思います。ソ連の80年代から米軍の21世紀と、自立性を奪われてきたアフガンの歴史を、今こそ省みる時だと思います。「北風政策」ではなく「太陽政策」の経済支援を。タリバンもまた、変革を余儀なくされるはず。資金凍結制裁すれば、苦しむのはアフガン人民です。米政府の、トランプよりひどいアフガン政策「みはなし作戦」の結果の混乱。中国・ロシア・イランの影響力が更にこの地域に広がるでしょう。

8月27日 さっきニュースを見ていたら、カブールで自衛隊機役割を果たせず立往生。これは日本政府が悪い。90年の湾岸戦争(90年1月)前の日本人救出時と同じ。危機管理がなっていない上に、米国政府頼りの失敗です。どの国も前もってこういう事態に対処するケースワークをしています。日本は9・11以降、テロ特措法だ、69億ドルのアフガン支援だと、結局米国の部下のようなことしか出来ず、現地で中村医師ら日本人たちがアフガン人民のために開いた機会を活かせていません。米国なしにどうタリバンと付き合っていくのか？ いかないのか？ 考えたこともなかったでしょう。米政府が8月末の撤退を決めたら、すぐ日本は残るのか？ 否か？ 明確にし、残る選択肢をとり、中村哲さんを讃えたタリバンの代表とカタール政府の仲介で話を付けるべきでした。米国と相対的別箇の位置を示して、日本独自の方法はいくらでも出来たのです。

イラクの時もそう。欧州の各国はブラント元首相など大物をサダム・フセインと対話させて、その飛行機でその国の人々を連れ帰りました。日本は準備もなく、米国の尻馬に乗ってサダム批判をしたため、バクダッドの日本大使館員たちを怒らせ怖がらせていました。米国人と同一視されるのでは？ という恐怖です。今回も同じ。

現地の人々の声をまず聞き、防衛するよりも先に正規雇用の外交官の日本大使館員12人がまず欧の飛行機で脱出したとか。民間人を置き去りに、いつも同じパターンで後始末がつかず、今回のような立往生になっています。当然アフガン人を救出に加えることはできないし、残って支えることにも立ち遅れました。空港での爆弾事件以前の問題です。

戦士たちのリッダ闘争(2)

重信房子

2、パールベックの神殿の庭で——サラハとの出会い

1971年10月。レバノンの10月はまだ「晩夏」とも言える気候で暑い日もある。空はまだ乾期の澄んだ高い青空。雲一つない。地中海ではまだ泳いでいる人もいて暖かい。

10月の初めか中旬頃か三人の仲間を迎えて、パールベックの訓練所に戻っていたパーシム(奥平剛士)から手紙が来た。パーシムは指揮官兼通訳兼PFLPとの調整などで多忙を極めていて、当分山を越えてベイルートへ下りていく時間が取れないという。情報や日本語の新聞や本もあり、私がパールベックまで出掛けることにした。もちろん私はパールベックの兵舎や訓練所には入ろうと思わないし、そこに行くことはできない。でもPFLPの許可を取れば、観光地として名高いパールベック神殿の観光客の一人となって、待ち合わせることはできるだろう。私はDさんに相談してみることにした。Dさんは私やパーシムが日本に居た時に、アラブ問題専門家のAさんからベイルートで最初に会うよう紹介された人だ。以来、彼女の芸術家仲間の会合に招かれたり、生活面でもお世話になっている人だ。詩人のアドニスやパレスチナ、レバノン、シリアの文化的な人々の作品発表や展示会も時間のある時には私も顔を出していた。Dさんも知られたアーティストであったのはベイルートで知った。ずっと気も合って仲良くしていた。Dさんの家はよく往き来している。すぐにDさんに相談すると、「OK、私も一緒に行きましょう。パーシムにはバッカス神殿で会いましょうと手紙を出したらいい。私がアレンジするから」と言ってくれた。

パールベックはベイルートから東方90kmのところにある。ベイルートからは2000mを超えるレバノン山系を越えて行く。レバノン山脈と2800mを越えるヘルモン山に連なるアンチレバノン山脈の間に「ローマの穀倉地帯」と昔から言われた肥沃なベカー高原が広がっている。このベカー高原には北へ流れるオロンテス川と南に流

れるリタニ川の水源があり、そのベカー高原の東北側にパールベックの街がある。

このパールベックには人類の歴史の揺籃期からメソポタミア、シュメール、フェニキアからパレスチナ、シリアへと広がったバアル神の神殿があった。バアル神は豊穰の神として紀元前3000年以上前からこの地域で信仰されていた。ヘレニズム時代にはギリシア人はこのバアル神を太陽の神とみなして、この地をギリシア神話の太陽神ヘリオスの街として「ヘリオポリス」と呼んでいた。後には新興宗教のユダヤ教やキリスト教によってバアル神は悪霊とみなされて排斥されていった。そのバアル神殿はローマ帝国支配が始まるとヴィーナス、ジュピター、バッカスの3つの神殿に変えられていった。この改築は紀元前1世紀後半にカエサルが着手し、ネロの時代に完成したと言われている。レバノンの観光地としてはこのパールベックの神殿やアルファベット発祥の地とされるビブロス遺跡が名高い。前にもDさんが一度見学に行こうと誘ってくれたが、私はまだ行けていない。

Dさんのアレンジで10月のある日、観光も兼ねて、おにぎりも準備して、Dさんと朝のベイルートを発ってパールベックへと向かった。ベイルートから東へ、2000m級の山道の狭い二車線を走り北へ向かうと、その先の青空の先に神殿の神秘で優雅な姿がくっきりと浮かびあがってきた。ベイルートから1時間半くらいだったか。もったかかったかも知れない。Dさんが「あれがパールベックのジュピター神殿の柱よ」と教えてくれた。青空を従えた6本の巨大な円柱が近づいてくる。ローマ時代には列柱は54本あり、神殿を囲んでいたという。神殿の入口には観光局の事務所があり、入場料を徴収し、また絵ハガキや本なども売っている。案内書によるとジュピター神殿はアテネのパテノン神殿を凌ぐ69m×106mのローマ神殿と記されていた。ジュピター神殿の偉大さに驚きつつ眺めながらゆっくりバッカス(ディオニソス)神殿に向かった。パーシムとはそこで待ち合わせるようになっていた。バッカス神殿もかなり巨大だ。屋根はすでにないが、大昔の地震

で崩れたそれらの天井の梁や柱は石畳に横たわっていて、メドゥーサなど神話の彫刻など見応えがある。柱や門を入ると、石畳の隙間に真紅のアドニスの花がまだ咲いていた。真紅のケシの花のようなその花は「アドニスの花」と言われるアネモネの花だとDさんから春に咲きだした頃に聞いた。アドニスはギリシア神話のエピソードにあるフェニキア、ピブロスの王子である。アフロディテ（ヴィーナス）がピブロスでアドニスに一目惚れしてしまった。アフロディテを愛する軍神マルスは嫉妬して猪に身を変えてアドニスを突き殺したという。そのアドニスの血からこの真紅の花が咲いたと言われている。ペイルートの海岸の岩場や路地、ベカー草原を花畑に変える主役はこの真紅のけし状の花。そこに佇んでいると、長い長い歴史の中の流れに砂粒より小さい自分の愚かしさが見えるよう。不思議な気分が目眩がしそう。

横たえられた大理石の石柱に座って一息ついていると、パーシムが仲間と一緒に現れた。白い長袖シャツの袖をまくり、カーキ色のズボンと登山靴。いつも街を歩く時の彼の服装は変わらない。段ボール箱を一つ抱えて歩いて来る。その隣りに小柄な日本人が一人。太陽が眩しいのか右手で顔の上の方に光を遮るようにしてショルダーバックを肩に掛けた若者が歩いてくる。白っぽいシャツにベージュ色のコットンパンツ姿だ。

Dさんとパーシムも話が合う間柄なので久しぶりとハグし合う。「新しい仲間のサラハです」とパーシムが紹介したので、Dさんも私もサラハ（安田安之）と握手した。「じゃあ、ここでちょっと宴会風に食事をしたり話を始めようか」とパーシムが段ボールを置いた。「ちょっと昼飯には早いけどね。我々だけでここへ来る時には、こんな大袈裟にはしないけど、今日は特別。訓練所の教官の助言で、その先でカバブとサラダやホンモスなんか仕入れて来たんだ」とパーシム。教官に送られてそこまで来た、レストランでテイクアウトしたカバブや丸いアラブパン、ひよこ豆のペーストにオリーブ油をかけたホンモスやハッカや赤カブ、レタス・トマトの野菜などやエビアン水などなど。段ボール箱から新聞紙を取り出して敷くとその上に次々と並べた。サラハがバッグからビニールシートを取り出して、莫塵代わりの敷物を敷くと、ピクニックの饗宴のようになった。「あ、私もおむすびとインスタントの焼きソバを

日本人会の人にもらったので作ってきた。それにコーヒーも水も」と、私も並べて、まわりを四人で囲んだ。「お、うまそう、おにぎりかあ、久しぶりだなあ。まずそれ頂きます」とサラハが身を乗り出しておにぎりを取ると食べだして、「いやー、うまい」とニコニコ顔。パーシムももう訓練に慣れた日焼けした顔を輝かせながら、Dさんに「ここはとても良いところだ。夏の暑さも凌ぎやすかったし、訓練も順調だし。サラハと一緒に来たあと二人と、もうこのパールベック神殿にも見学に来た」など話している。Dさんが「このパールベックにもペイルートのシャティーラ難民キャンプのような小規模の一万弱のジャーイル難民キャンプがあるのよ」と言うと、パーシムは、そこから教官やパーシムたちくらいの若者が訓練所に来ていると話した。サラハが私に「ここに着く前にアテネの有名なパンテノン神殿も見学したけど、こっちのパールベックの方が劇的ですよらしい。向こうの方が有名だけど」と話しかけてきた。「海外旅行大変だった？言葉とか飛行機の乗り継ぎとか」と尋ねると「うん、とてもいい体験」「あそこに行ったことは話していいのかな」と小声でパーシムに聞きながら「緊張しまくりましたよ」と笑っていた。アラブ料理の説明をDさんが食べながらひとしきり語り、コーヒーを飲むと、「私、これからこちらの方に居る友人に会いに行ってくる。帰りはマリアンもう大丈夫でしょう？」と私に聞いた。「OKよ、このすぐ先にペイルート行きの乗合いタクシー、セルビスもあるってさっき教えてくれたでしょ。大丈夫です」と、私はDさんに答えた。若松・足立監督と映画作りでゴラン高原のPFLP部隊を廻った時、そこに駐屯するコマンドたちが私にアラブ名「マリアン」と名付けてくれたので、以来、私はマリアンと呼ばれていた。

Dさんが去った後、私たち三人は挨拶しなおして雑談がてら話を始めた。パーシムが「京都では僕の手紙を届ける時、一騒動あったらしいよ」とニヤリと笑いながらサラハを見た。「ウワハハ」と笑いながらサラハが話してくれたことによると……。私の友人がパーシムの手紙を京都の友人に届けるために、まずパーシムが住んでいた下宿を訪ねた。いくつかのコンタクト方法でそれが一番判りやすいと友人に教えていたためだった。そこにはパーシムの弟が住んでいて、彼からサラ

ハたちに連絡してもらおうように私たちが頼んだためだ。

友人はパーシムの下宿先をまず訪ねた。大家の庭にある納屋のようなパーシムたちの住居を、私は「まあ、山小屋みたいな……」と言ったこともある雑然とした感じの小屋である。友人が大家の門を入れてすぐのパーシムたちの住居に近づくと、ドアは開いていて、中には人は居らず、部屋中がひっくり返されていて、家宅捜索の後だと直感し、友人はあわてて退去した。監視がないか確認しながら他の方法でサラハたちと会えたという。友人がサラハに家宅捜索の件を告げると、サラハはキョトンとしてパーシムの弟に確かめ、そんなことはなかったのが判った。つまり、それくらい部屋の中が雑然としていただけだったという。学生運動と無縁だった私の友人は仰天して家宅捜索の跡とってしまったというので、みんなで大笑いになったらしい。そんなこともあったが、他は万事順調だったよと話してくれた。

パーシムが横からイスラエル入国時一つバックがチェックされて、サラハの辞書のページが破られていた話をしてくれた。サラハは、それは意味のない計算のメモだったけど、何か暗号と思ったのかも知れない、それなら、もっとあちこち落書きしておけばよかったと笑った。軍事活動や調査内容については、当該の機密扱いなので、私は知る立場にない。だからそれ以上はこちらも聞かない。どの作戦もそうであったが、作戦の内容（日時、場所、部隊、対象や行程など）については、実行者以外知らせない。場合によっては、作戦部隊の責任者しか全体を知らないこともある。イスラエルの拷問に加えて、アラブ世界ではヨルダン政府に示されるように、秘密警察による拷問が常態化している。そのため、PFLPの指導部や当事者にも作戦内容全体は知らせない場合が多い。それがお互いを守る方法なのだ。PFLPは拷問による自供を責めたりしない。それは人間の精神的肉体的限界の中で恥辱を強いられた仲間に対する思いやりであり原則なのだ。その分、「知らないこと」が最善の防御として、特に機密に厳しかった。そんな訳でこれからの作戦の話よりもこれまでの作戦やハイジャック闘争についてのPFLPの見解などを語り合った。

私はちょうど6月から7月の若松・足立監督とのヨルダン・ジェラシ山岳地帯での経験について



話した。70年ヨルダン内戦の停戦協定に基づいて残されたヨルダンとパレスチナの国境地帯のジェラシ軍事基地の様子。昼夜この基地をヨルダン軍の砲弾が気紛れに襲う。占領下のパレスチナへの潜入の闘いと共に背後のヨルダン軍に対しても対峙せざるを得ず戦士たちは二重の闘いを強いられていた。7月に私たちがPFLP司令官から下山命令を受けてペイルートに辿り着いた時には、そのパレスチナ解放勢力の根拠地が、激しいヨルダン軍のゲリラ壊滅作戦が始まりつづされたこと。戦士たちは一週間食糧もなく闘い何千人も殺され、投降を余儀なくされたこと。その後ヨルダン軍は特にPFLPに恨みを持ち、PFLPと判るとカードルは絞首刑で殺した。昨日まで語り合い、世話になったPFLPのカードルたちが首から罪状を記した看板をつらされて絞首刑に吊された姿がアラブの新聞に連日載っていたこと……。戦争といっても、イスラエルもヨルダンも米国政府に助けられ、人民の抵抗の闘いは常に厳しい打撃を受ける。しかし諦めない。なぜなら正義であり生存の闘いだから、と私も語った。

戦争は絶対悪なのは帝国主義国同士の戦争のことだ。それに帝国主義の植民地争奪の侵略戦争もそう。それらは絶対的に許しがたい悪だけど、帝国主義の侵略、植民地支配に抵抗する人民戦争は無条件に支持されるべきだ。だからどんな方法でも闘っているのか、と論じ合いもした。当時のパーシムやサラハ、そして私のコンセンサスは、弱い立場に置かれた被占領者の人々が占領や抑圧、侵略に立ち向かう抵抗運動・解放運動はハイジャックを含めてどんなやり方でも闘う権利がある、正しいと支持するという立場だった。民間人や無

関係な人を巻き添えにしていのか?と問われれば、「もちろん最大限避けるように闘うが、結果として被害が出るのはやむをえず、非難も甘受する」という立場だとPFLPの闘い方について評価を語り合った。そして義勇兵として、ライラ・ハリドと一緒に70年9月、ヨルダン内戦時イスラエルの航空機エルアルをハイジャックしようとして殺されたパトリック・アルグレロについて、ライラから聞いた話をパーシムがサラハに語った。

パトリックは二七歳。三児でサンフランシスコ生まれのニカラグア系米国人。テルアビブ発アムステルダム経由ニューヨーク行き便だった。9月6日午後、ライラたち二人が行動を起こすと、すかさず6人の銃を手にした男たちが立ちほだかった。ライラは手榴弾の安全ピンを投げ捨てて、自分たちが本気であり、撃ったら飛行機が爆発することを悟らせた。しかしコックピットは二重扉で開かず、銃声と共に飛行機はきりもみ状態に下降した。その瞬間2つの手榴弾をもぎ取ろうとする男たちに飛びかかれ、一瞬気を失ったすきに制圧され、手榴弾を奪われ、後ろ手に縛られた。ライラの三度目のハイジャックは失敗した。男たちはライラの目の前で30センチほどの至近距離からパトリックの背中に4発の弾丸を発射した。パトリックはライラを見つめたまま絶命したという。パトリックは国際主義の信念のもとパレスチナ解放闘争で殉教したPFLPの初めての外国人義勇兵となった。ライラの言葉を思い出すようにゆっくりとパーシムが語った。

サラハは難民キャンプの子供たちを語り、本当の闘いの必然性を日々数えられると語った。海外に出る時にはもう帰国しない場合もあるかもしれんとオリードとちょっとした「置きみやげ」の闘争をしてきた。だけど生活が闘いで全人民武装の精神のキャンプの人たちのイスラエルから追われた時の「ナクバ」の話なんか聞くと、自分たちの日本の闘いは本当に趣味のようなものだったと思う、とサラハが話していた。「置きみやげ」の闘いの話は本当で、70年代ずいぶん経った後で、その事件の犯人にされて冤罪に苦しんでいる人が居るのでと弁護士がアラブまで訪ねて来たことがある。すでにサラハは戦死していたが、私自身はどこでどんな事件を起こしたか真相を知っていた訳ではなかった。誤認逮捕された冤罪の人

には申し訳ないが、「真犯人」を突き出すことなく、無罪を勝ち取ってほしいと弁護士と話し合い、実際そうだったと聞いた。

パーシムたちはすでに第一段階のちょっとした訓練を終えて、次に進むところだという。サラハの他の二人の仲間はすでに訓練教官からアラブ名ユセフ、オリードという名をもらっていた。私自身、当時この三人の仲間の本名は知らなかったし、お互い本名は名乗らなくても、パーシムの信頼する仲間サラハ、ユセフ(檜森孝雄)、オリード(山田修)で十分だった。パーシムは自分に何かあった場合、連絡を取り合えるように、サラハを紹介しようと一緒に来たのだと言った。「サラハは腹が据わっているし、世慣れているから何事にも対処できる。信頼して良い」とパーシムが私に言った。後に三人を知って思ったが、サラハが一番柔軟な思考をする人だな、と思った。サラハはざっくばらんで、自民党の地域のボスの父と優しい母親の話をしていた。兄貴が居たので跡継ぎは居るし、何でも許されて自分勝手をして育ったという。「何でもやってみないと気が済まない性格」で、高校時代から同棲まがいの経験も積んだと笑いながらエピソードを一杯話してくれた。サラハの出身の高校では卒業生が在校生に大学の受験や大学の経験を話すイベントがある。京大のことを話すつもりで高校に行ったら、教師らがあわてて出てきて、講堂のイベント会場に行かせないようサラハを歓待して囲い込んでいたほどだったという。また教師を困らすようなろくでもない煽動でもされたらと案じたらしい。あれこれのエピソードを面白おかしく話すサラハ。型破りな人として一目置かれていたようだ。それに麻雀はプロ級の腕前とパーシムがひやかしながら言った。

ユセフはサラハのことをこんなふうに見ている。「サラハに会った時は、走るのもしんどい太めの体型だったが、3ヶ月かけて彼の脂肪腹は見事に締まった。サラハは誰にでも好かれていた。ジャリール難民キャンプで祝い事があると訓練所に差入れが届けられる。まず最初に大盛の皿はサラハ、サラハ!と届けられる。盛りはみんな食べても残るが、それは必ずサラハ、サラハ!とみんなが彼に平らげる役割を求める。サラハはムリしても受け止めて涙を流しながら食べて笑わせる。のちの11月から12月、行軍

競走は何度かやったが、氷雨の行軍はさすがにきつかった。遅れる者が続いた。互いの距離は山を一つ、二つ隔てるほど離れ、到着には数時間の差が出てしまう。サラハはしんがりで来た。サラハはパレスチナの仲間をサポートし、肺炎を起こしかけていた最後の一人に付いてきたのだ。彼には何でも見え、受け止める度量があり、明るく、何事にも腹を括ったところがあった」と、ユセフは述べている。

パーシムの率先垂範の統率力に、サラハのフォローが大きな役割を果たし、チームワークを作りあげていったのだと思う。

サラハの友人には破目を外す奴もいて、うち一人はトルコで大麻取締りで逮捕されて裁判になるらしいと話していた。当時はまだ海外への個人旅行は少ない時代で、そんな大胆なことをした人が居たのか……と、びっくりしながら話を聞いたのを覚えている。パーシムとサラハの仲は兄弟のように一体でも、サラハはパーシムのことを「おっさん」と呼ぶ。二歳しか年が離れていないのに。サラハは京都パルチザンの限界を語り、独自の地下部隊形成もこちらできっちりパレスチナ解放闘争に連帯して闘わないと話にならんわな、とパーシムと話していた。パーシムへの信頼感は伝わってくる。サラハはこの間、第一段の訓練が終わった休日、お互いに「桃園の誓い」を交わしたんだと言った。「あの中国の三国志演義の?」と聴くとパーシムも頷いた。すでにパーシムは作戦の輪廓を描き、共に闘う仲間として三人を招請したのだろう。私が「劉備が関羽・張飛に語り契った言葉……。覚えている?」と桃園の誓いについて聴くと、パーシムが謳った。「姓名を異にするといえども、兄弟の契りを結び、心を一つにして力を合わせ、困苦にある者を救い、同年同月に生まれること叶わざるも、願わくば同年同月に死せん……」。本の一節を低い呟くような声で謳った。まだ夏の残るアラブの10月。台地に熟れ残った桃の実る樹の下で地酒のアラクを酌み交わしながら四人で桃園の誓いを交わしたという。これはきっと作戦の誓い。生きるも死ぬも一緒という契りだ……。死ぬ気かのか?……私は思わず目を見張ってパーシムを見た。パーシムはちょっと照れたように天を仰いで「そんな気持ちにさせるところだよ、こゝは」と少し笑いながら言った。「本当にいいところ。心が洗われるし、日本で何をし

てたんだと思う。太り体型も少しスマートになった」とサラハは言う。

サラハによると、5時には起きてしまう。5時半起床で体操・掃除、朝食準備、食事のあとは訓練、フィールドワーク。昼食後はゆっくり休む。午後は軍事戦術、フィールドワーク、机上訓練と続く。5時過ぎには夕食準備して7時頃には食べ終えて、討議したり勉強したり、毎日気持のよい規律ある生活だという。夜10時には寝るし。星が手の届くところにまで降りてきて、流れ星はいつも降ってくる。漆黒の闇を日本人は忘れていないのに気づいたとサラハは感動していた。パーシムが編みだしたラジオ体操風の「赤軍体操」で朝は始まり、ランニングもやるから食事もうまい。訓練は銃の扱い、爆発物など第一段階を終えたところだという。「本当に来てよかった。パレスチナの子供たちと遊び、親からナクバの話を聞いたら、自分の命で済むなら使ってくれという気分になる。本気だよなあ、おっさん」とサラハは笑う。

こんなふうに、私たち三人はとりとめもなく話を続けた。日本の本部からは訓練者の派遣の件は今も何の連絡もないこと、もうすぐ若松・足立監督が撮った映画フィルムが届くこと、PFLPの訪日した同志がきっと日本の感想を語ってくれるだろうことなど、私も連絡事項を語り、様々な日本の資料や日本人会の友人たちがくれた新聞や雑誌、日本食も渡した。お金を渡そうとしたがパーシムはいつものように受けとらない。「そっちこそ金欠だろう。こっちは必要ない。それと日本食はいらない。パレスチナの仲間と一緒に居るのでそれを食べることはできないから。資料や新聞雑誌だけにしとくよ」と言う。

サラハの話聞いて、ユセフ、オリードもパーシムと意気投合しているのがわかる。新しいチームが生まれていることが私も嬉しかった。

私がユセフ、オリードと会うのは、もっとうつと後になる。

註記: アラブ名	本名
パーシム	奥平剛士
サラハ	安田安之
ユセフ	檜森孝雄
オリード	山田修

第二次インテイクファダから21年目のパレスチナ

戸平和夫（オリーブの会）

タイトルは「第二次インテイクファダから21年目のパレスチナ」ということになっていますが、個人的には、1987年の第一次インテイクファダの頃は中東に居て、毎日 PFLP の人から情勢のブリーフィングを受けていたので、感性的な認識がありますが、第二次インテイクファダの時は、獄中にいて情報が乏しく、感性的な認識はありません。ということで、資料を見ながら、歴史を追ってみたいと思います。まずは、現状から見て行きましょう。

パレスチナの分裂の深刻化

パレスチナの分裂した状況は、トランプ政権の時に、克服の可能性が高まったが、バイデン政権になって、再び自治政府は和平交渉に期待をかけることになり、自治政府が総選挙を延期したことと相まって、分裂状況は拡大した。とりわけ、イスラエルとの治安共同まで復活したことは、この分裂を決定的にした。

東エルサレムでのシェクジャラの住民の追い出しは、激しい入植者と占領軍と連日の衝突を生み、また、入植者によるエルサレム旧市街での旗の行進による挑発。そして、それがアル・アクサモスクでのパレスチナ人礼拝者とイスラエル占領軍との対峙を生み、また、48年領内のパレスチナ人の礼拝のためのバスをイスラエルが止め、パレスチナ人はバスを降りて、アル・アクサに向かった。それはすでにイスラエル警察によるアラブ人地区での犯罪の放置への怒りとして爆発していたところに油を注ぐことになった。そして、パレスチナ人の怒りは、全パレスチナ広がった。

ハマス、人民戦線などのガザの抵抗勢力は、「エルサレムの剣」作戦で、大量のロケットをイスラエルに打ち込んだ。この闘いは、パレスチナ人全体に歓迎された。とりわけ、テルアビブまでロケットを飛ばしたことは、もちろんこれは、イスラエルのガザに対する多量な報復を生んだが、パレスチナ人全体の士気は高まった。

もう一方で、こうしたパレスチナ人全体の闘いの高揚の中で際立ったのが、自治政府の存在がないことであった。自治政府が、アメリカの仲介による交渉に期待をかけたとしても、パレスチナ人の多数は、交渉に意味のないことを知っている。

イスラエルは分裂を利用し、自治政府をてこ入れし、ハマスの弱体化を図ろうとしている。そして、現在のパレスチナなどの政治交渉を否定してい

る。すでに湾岸諸国などのアラブ諸国はイスラエルとの国交を正常化し、アラブにとってもパレスチナの大義が第一ではなく、自国の利益が第一であることを示した。急いでパレスチナと交渉する緊急性はなくなっている。

オスロ合意と第二次インテイクファダ

第二次インテイクファダ（アル・アクサ・インテイクファダ）は、2000年9月28日にイスラエルのシャロン・リクード党首・外相（後に首相）が1,000名の武装した側近と共にアル・アクサモスクに急襲したのがきっかけであった。この暴挙にパレスチナの民衆の怒りが爆発した。

この蜂起は、PLOの和平交渉を頓挫させた。蜂起は2005年まで続いた。これは、パレスチナ民衆のオスロ合意への拒否を示していた。

パレスチナ自治政府（正確には暫定自治政府、あくまで暫定である）はパレスチナ解放機構とイスラエルによるオスロ合意により、1994年に設立された。自治政府が安全保障と文民統制を管轄する都市区域（エリアA）、文民統制のみおこなう辺境区域（エリアB）がある。残りの地域のイスラエル人入植地、ヨルダン谷、及びパレスチナ地区を結ぶバイパス道路はイスラエル管轄区域（エリアC）となった。エルサレムの地位は、その後の交渉によって決定されるとした。

オスロ合意そのものも、第一次イラク戦争で、アラブ諸国が米国側につき中でパレスチナが Saddam を支持したために、アラブ世界からも孤立した。オスロ合意は、米国とイスラエル、そして、アラブ反動に押し付けられたものであり、PLOもそれに自らの生存を託すことになり、パレスチナの民衆にとっては、前進と言えないものであり、その中でPLOの主流派であったファタハの既得権益が拡大された。ハマスをはじめ、パレスチナの諸

派は、その合意に反対した。

発足当初の1996年の第1回総選挙ではヤセル・アラファトが88.2%の得票率で初代大統領に選出され、アラファト率いる対イスラエル穏健派ファタハが立法評議会選挙で定数88議席のうち55議席という圧倒的多数の議席を確保して政権を運営していたが、縁故採用や汚職が相次いだことで徐々に支持を失った。

特にアラファト死後の2006年に実施した2回目の総選挙ではイスラム原理主義にたつハマスが第1党となった。第一次インテイクファダの中で生まれたハマスは、第二次インテイクファダでも存在感を増していた。米国、西欧、イスラエルは、ハマスをテロ組織として、この選挙結果を認めなかった。そして、交渉推進派のアッパースとファタハを支持していた。

2003年には、米国の反テロ路線に合わせて、イラン、ヒズボラ、ハマスをテロ組織として、それに対抗するアラブ反動諸国とイスラエルの同盟をつくり、そこにパレスチナ自治政府を組み入れることに、米国、イスラエルの戦略が再編された。この時点でもはやパレスチナ問題が中東問題の中心ではなくなった。

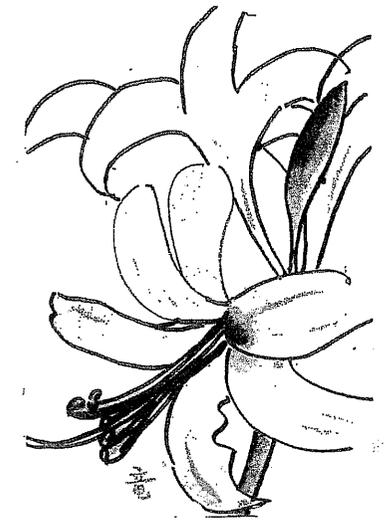
アラファトの後継者として大統領に就任したファタハ議長のマフムード・アッパースとハマスの内閣はたびたび対立し、2006年にガザ地区でファタハとハマスの武装組織が衝突し、ハマスはガザ地区を武力制圧した。アッパースはハマスのイスマイル・ハニヤを首相職から解任したが、ハニヤは拒否し、ハマス率いるガザ地区とファタハ率いるヨルダン川西岸地区は2007年以降分裂状態となっていた。これが、現在の分裂状況にまで続いている。

分裂を克服する試みは、エジプトの仲介で何度も行われ、暫定統一政府も誕生したこともあったが、分裂の根本的な問題が解決されず、何度も失敗してきた。

この間にイスラエルは、ハマスが支配するガザに対して、空からだけでなく、地上部隊による攻撃を行い、パレスチナ側に多数の死傷者が出た。

アラブの春

2010年にいわゆるアラブの春が起こったが、チュニジア、エジプトでは、旧来の政権が倒され、リビアでは、欧米の支援のもとでカダフィ政権が



打倒され、シリアは、イスラム同志会を中心とする反乱から外国勢力が介入する悲惨な内戦に陥り、イスラム原理主義のテロ組織が躍進するようになった。湾岸でも支配層のスニー派に対して、国民の多数を占めるシーア派住民が、抗議行動を行い、湾岸諸国の王族を守るために、サウジが軍を派遣するなどした。その混乱の中でシリア、イラクにISが生まれ、状況をより複雑にし、中東の焦点は、もはやパレスチナではない状況が作られ、イスラエルには有利な状況となった。アラブ諸国の混乱と弱体化は、イスラエルの安全を高めることになった。

パレスチナにおけるアラブの春の影響は、エジプトで親イスラエルのムバラク政権が倒れ、イスラム同志会のムルシ政権が生まれたことに明らかだった。ハマスはもともとイスラム同志会のパレスチナ支部で、イスラム同志会の政権ができたことは、イスラエルだけでなく、エジプトからの封鎖を受けていたガザにとって、状況が改善されることになり、その上で、ハマスとファタハの和解が進められる条件ができた。しかし、ムルシ政権は、軍のクーデターで、再び軍の独裁政権に変わり、ムバラク政権と同様に、イスラエルと結んでガザを封鎖した。

このアラブの春で進んだのは、シーア派枢軸とスニー派枢軸との対立であり、国家的にはイラン-イラクー-シリア-ヒズボラの流れ、ハマスはスニー派であるが、そちらに入れられている。他方ではサウジを盟主として、湾岸諸国などに分れることになり、イエメンは、イランから支援を

受けるフーシ派とサウジ、湾岸諸国から支援を受けた旧来の支配者との戦争状況がある。

ネタニヤフ・トランプ時代

米国に、親イスラエルのトランプ政権ができたことで、パレスチナの状況はさらに悪くなった。これまで、米国は、表向きには仲介者のようにふるまっていたが、トランプになって、仲介者ではなく、あからさまにイスラエルの立場にたつた。トランプは「世紀の取引」を標榜し、「繁栄のための平和」プランを提案し、パレスチナの大義を夢物語なものとし、各国の経済的利益と安全保障を第一とした。経済的繁栄を求めて話し合う中東和平経済会議が、パレスチナを除きイスラエルとアラブ諸国の間で持たれた。これは、その後の「正常化」に続くことになる。

このアラブ諸国とは、サウジと湾岸諸国などパレスチナの問題よりもイランの脅威に対して、イスラエルと共同することの利益をえらんだ国々である。アラブの大義は捨てられ、自国の利益で動いた。スーダンは、テロ国家規定をアメリカが外すということで、イスラエルとの国交を正常化した。モロッコも、対アルジェリアのために、イスラエルとの正常化に走った。

アラブ諸国は、自国の利益の前に、パレスチナアラブの大義を捨て去り、自治政府は、アラブの中でも孤立することになった。

トランプのオスロ合意をも無視したイスラエル寄りの政策にさすがの自治政府も、イスラエル共同を否定し、オスロ合意を見直すといわざるをえない、それがハマスのような民族統一の機運をつくりだすことになった。

ところが、バイデン政権の登場で、自治政府は、交渉への色気を示す。そのため、再び、総選挙を延期した。イスラエル、アメリカは総選挙に反対していた。それは、ハマスが勝利し、アッバース、ファタハが敗北するのが明確であったからである。

これで、トランプ時代以前にもどり、自治政府は、イスラエルとの治安共同を復活させるところまでに至った。ハマスをはじめ、パレスチナの諸党派は、これを批判し、再び分裂は決定的になった。

イスラエルは、ネタニヤフが政権から去っても、右から左、アラブ系までのベネットを首班とする連立政権でも、イスラエルの世論そのものが右傾

化しており、以前の労働党政権のように和平交渉に熱心ではなく、ネタニヤフ時代のように西岸の実質的併合に進むことは明確であった。とくに、現在の首相であるベネットは極右であり、和平交渉などは望むべくもない。また、バイデン政権もトランプが既成事実として作り上げた、中東の新たな構造を否定することはできず、イランとの核合意にもどると宣言しても、現実には厳しいものとなっている。バイデンが東エルサレムに米国領事館を再開しても、UNRWA への拠出を再開したとしても、和平交渉が再開されることはない。

イスラエルは併合の既成事実を作っている。パレスチナとの政治交渉はありえないとしている。イスラエルの狙いは、自治政府を現在のまま延命させて、ハマスと対峙させ、パレスチナ人を支配させることで、イスラエルの安全に貢献させることではない。

他のパレスチナ諸派、パレスチナ民衆がそれに反対するのは当然のことであり、抵抗闘争は、パレスチナ全土に広がっている。

しかし、パレスチナの困難は、軍事的に従属されているだけでなく、経済的にもイスラエルに従属されていることである。経済的な主権まで奪われた状態にあり、イスラエル経済との関係抜きでは、困難な状態にある。パレスチナの中では、UAWC（農業労働委員会連合）などのNGOが食料主権の確立を訴え、パレスチナの自立した農業をはじめ、食料生産をめざし、パレスチナの主権を確立する運動が存在している。イスラエルはこうしたNGOに対しても、テロ組織と関係があるとでっち上げ、国際団体に援助させないようにしている。また、この間パレスチナの運動の中でイスラエルの脅威となっているイスラエルボイコット（DBS）運動がターゲットにされ、イスラエルだけでなく、米国においても、DBS運動を非合法化する動きがある。それぐらい、イスラエルに脅威を与えているということである。こうしたNGOに運動は、国際的な結びつきが強く、国境を超える運動となり、それが、国家主権を制約する可能性をもっている。パレスチナ各地での民衆のイスラエルと対峙する闘いは、現状を変えていく可能性をもっている。取り残されているのは、小権力者である自治政府である。自治政府に批判的な市民運動の指導者を逮捕殺害したりしており、パレスチナ民衆の利益にたっていない。

「大資本はなぜ私たちが恐れるのか」を読んで

重信房子

「武建一が語る・大資本はなぜ私たちが恐れるのか」（旬報社刊）を読みました。

あまりにも理不尽。私のいた60年代では考えられない権力のやり方に驚かされると同時に、その理由を教えてくれるのが、この本です。本の帯に「641日間にも及ぶ長期拘留！89人にも及ぶ逮捕者！なぜいま戦後最大規模の刑事弾圧が労働組合に加えられるのか！？」とあるように「関西生コン支部」に対する、戦前、またはGHQ占領時代のような弾圧の復活に憤りと共にこの本を読みました。著者の武建一さんは1943年鹿児島・徳之島生まれで、19才で大阪に出て、生コン運転手として劣悪な労働環境のもとでも模範的労働者として働きます。

しかし会社のあまりの理不尽（組合で労働者のために一心に活動し労働環境の改善を求めている先輩が解雇されたこと）にたちあがり、1965年生コン支部を結成して23才で初代委員長に就任します。以来あたりまえの組合運動すら会社側の雇うヤクザに妨害され、あやうく殺される破目にあう拉致も受けます。（その時のことは「徳之島出身の者は殺させない」というヤクザの中に徳之島出身の人間がいて生命がつながったのを後になって知ったと記しています。）

この本では、関西生コン支部にかけられた弾圧が、いかに不当で憲法違反であるかわかりやすく、読者の目線に答えるように記されています。日経連の会長であり、セメント協会会長であった大槻文平が、96年日経連の機関紙で、「関西生コンの運動は資本主義の根幹にかかわる運動をしている」と述べたようですが、そこに支配階級が恐怖し関生支部を潰そうと繰り返す刑事弾圧の本音、本質が示されています。

著者は「恐喝」・「強要」・「威力業務妨害」などの刑事弾圧に対し次のように述べています。「これは労働組合運動に対する弾圧だ。容疑を問われたことのすべては、憲法28条で保障されている労働組合の団結権・団体交渉権・団体行動権を行使したに過ぎない。いづれも労働組合の活動として正当なことばかりで、逮捕は完全なでっちあげだ。マスメディアは、凶悪犯のように報道しているが、

決してそんなことはない」と訴えています。普通の組合活動で89人も各地で逮捕されているのは、憲法で保障されている組合活動を原則的に行う団体が減り、関生支部を狙い撃ちしてこうした形の組合運動をなくそうとする新自由主義の政策としてあることを忘れることは出来ません。

日本では戦後の「産業別労働組合」が「企業内組合」にとってかえられ、大企業は「企業内組合」を育て、経営側の許容の範囲内に運動の矮小化を図ってきました。関生支部は個別の労働組合から出発しその発展として建設、生コン業界全体の働く人々の利益を守るために、「企業内組合」ではなく「産業別労組」という枠組みで、会社を越え社会と結びついて闘ってきたことは良く知られています。そして更に建設大手とセメント大手の狭間で、両方からいいように収奪される生コン業界のバラバラな中小企業経営者らを組織し、彼らとも組んで、大手企業にむけた闘いの戦略構図として「大阪広域の協同組合」を更に創出していきました。それを一つにまとめていったのも著者たち関生支部です。もちろん中小企業の悪徳な経営者も居ましたが、それらをねばり強く一つに結びつけていったのです。この構図「生コン支部方式」が他の産業にも全国化すれば、独占企業は勝手な振る舞い、下請け中小企業への無理な価格や納期の押し付けなどが危うくなることを知っています。そうした資本と権力が一体に「産業別組合」として地域社会とも結びつく労働組合運動のモデルである関生支部と、その方針を共有する各地の組合幹部たちへの「犯罪者化」を決断し、潰しにかかってきたのが2000年代以降です。

著者たちが、阪神淡路大震災の建物の倒壊を直視し、建物の水増しコンクリートの施工不良に対して、コンクリート建設を正そうとしたり、適正価格を求める「コンプライアンス活動」が「恐喝」や「犯罪」とされてきたのです。こうした悪徳企業は、著者らが奔走してつくりあげた中小企業の「大阪広域協同組合」未加入のぬけがけ企業ですが、大資本からのコンプライアンス活動への圧力が当然かかります。大資本からの圧力に労働組合と協同組合で、共にはね返した時代から、大資本

のいいなりに従う「広域協同組合」内の勢力も登場し、協同組合指導部も変質していきます。労働組合と大資本の闘いの反映として、中小企業の個別利害を主張する勢力が大資本と組んで関生支部潰しにかかり、権力と共同した動きを活発化していく。この本に書かれている歴史を読むとその利潤追求のあくどさがよくわかります。それまでは、関生支部に助けられた「広域協同組合」の新しい理事長は、かつて悪徳企業がヤクザを雇って組合潰しをやったように、レイシストと手を組み巨費を投じて関生潰しのプロパガンダを全面化していきます。権力と共謀した勢力のこうした動きが今回の弾圧へと至っています。

本の終わりに安田淳一さんが「解題 私自身が自由に生きていくために」を寄せていますが、そこでレイシストであり、ナチ・ヒトラー信奉の人物がグループを動員して関生支部グループに対し、ヘイト行動を起こしていることを記しています。この人物は広域協同組合理事長ら指導部に金で雇われてヘイト活動を行っています。それを「業務委託契約料」だと開き直り正当化し、関生支部グループに対するデマをSNS、街頭でヘイト行動を繰り返している実態も詳しく安田さんが記しています。この「合法性」と開き直るレイシスト集団は中国・朝鮮にたいするヘイト行動とひとつにつながっています。

関生支部は闘いの壮烈さにおいて、又、労働組合、協同組合協議会、地域社会の再生の展望において優れて革命性を内包しているが故に、現在の公安警察国家の強権統制の最前線を強いられてい

るのがよくわかります。今、この著者らの労働運動を日本で業種・地域を越えて守り抜かないと、未来の日本の労働運動は独占・大資本経営陣の言いなりのものしか残れなくなる……と、強い危機感をもって読みました。これは著者らの問題のみならず、自分たち自身の表現・言論の自由、基本的人権を守る闘いにつながっています。

「第一章刑事弾圧」で現状を学び、第二章で生立ちから「タコ部屋」の過酷労働を知り、第三章では70年代の万博・オイルショックやヤクザ大資本との闘い、第四章、大同団結の時代が記されていて輝く歴史も厳しい現在も、わかり易く記されています。私も「関生に連帯する」と云いつつ、詳しく知りえなかったことが纏められて基本骨格がよくわかりました。多くの方が読めば今の日本の進んでいく先が見え、こうしてはいられないと思うでしょう。 2021. 4. 21記

154号の誤植の訂正とお詫び

3頁下から3行目 イスレエル→イスラエル

3頁下から2行目 パレスチナ人をテロリストとして→パレスチナ人を喧嘩両成敗とする欺瞞に抗議する。占領下抵抗を強いられたパレスチナ人をテロリストとして

4頁左端の短歌 三月→五月

5頁左列下から4行目「表現がまずかった→「まずかった」

10右列下から1行目 と8か。→とか。

16頁右列 注3 3月30日→3月31日

後記

いつもイラストを寄せてもらっている竜子さんから、今回、13頁に使いましたイヌコログサのきれいなイラストを受け取って、共に暮らした猫を思い出し、なにか懐かしいような優しい気持ちになりました。イヌコログサと言うのですね。エノコログサとも言うようですが、私はネコジャラシとして親しんできました。一つの草の名前が、犬だったり猫だったりするなんておかしいですね。

18年近く一緒に暮らした、猫の相棒が今年亡くなってしまったのですが、彼が子ねこの頃、ネコジャラシをふたつ啜って帰ってきたことがあって、おかしくて、可愛くて、笑ってしまいました。きっとじゃれて遊んで気に入ったのでしょう。やっぱりネコジャラシですよ。

そんな木漏れ日にきらめくような追憶を送ってくださって、竜子さんありがとう。(Y)

重信房子さんへの郵送アドレス 〒196-0035 東京都昭島市もくせいの杜2-1-9 重信房子

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

頒布価格 500円